

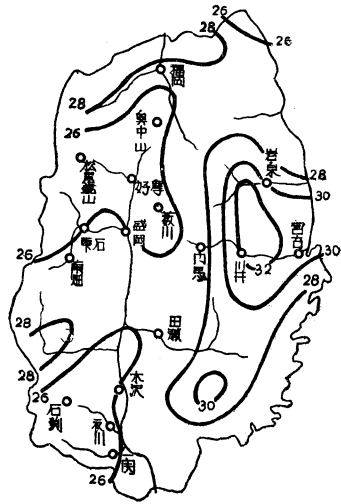
# 昭和31年7月27,28日の岩手県における 最高気温について

加藤 吉 男\*

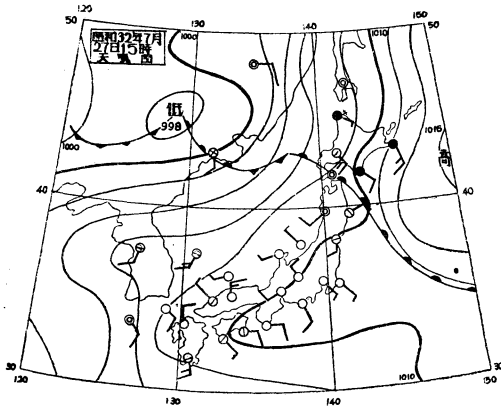
はしがき 昭和31年7月27日の最高気温は沿岸に高く殊に宮古から閉伊川ぞいに顕著で岩泉では32.2°Cに達したが内陸では朝方霧雨が降って終日梅雨空が続き最高気温も26°Cを示したにすぎず特に北上川流域の北部奥羽山脈よりでは25°C以下の所もあってその差は7°Cに達した。翌28日には内陸の気温も急昇して特に盛岡以南の北上川流域では最高気温が33°Cに昇りその前日差は8°Cにも達した。筆者はこの両日の最高気温分布の特異性について若干の解析を試みたので次に報告する。

## 1. 7月27日の最高気温について

沿岸地方では26日から気温上昇の傾向を示し、宮古岩泉附近に既に+6°Cの昇温域が見られた。一方内陸では盛岡および水沢附近の-2°Cを中心に北上川ぞいに南北に細長くのびる降温域を作っている。前記+6°Cの昇温域は閉伊川ぞいに西進27日には閉伊川中流域に位置し、内陸の降温域は弱まりながら奥羽山脈より西進



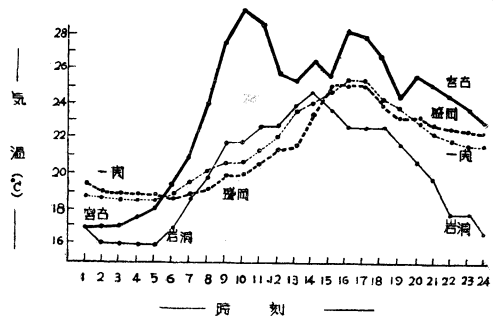
第2図 昭和31年7月27日最高気温分布



第1図 7月27日15時天気図

した。当日の天気図を第1図に示したがこの日内陸では梅雨模様の天気で最高気温も26°C前後を示したにすぎなかったが宮古では8時頃から気温が急昇して10時には既に29.7°Cに達し最高気温の分布は第2図に示したとおり宮古の31.3°C、岩泉の32.2°Cを中心に30°C以上の地域は閉伊川ぞいの沿岸中部に観測された。以下総合自記気候観測装置および区内観測所から得られた資料を用い、これについて検討してみる。

第3図は宮古、岩洞（北上山系、海拔678m）および

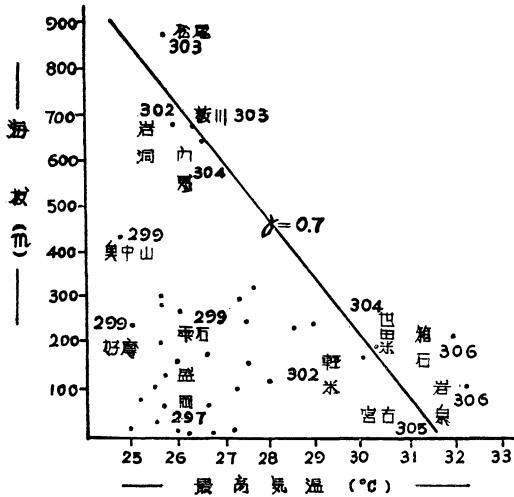


第3図 7月27日の各地の気温毎時変化

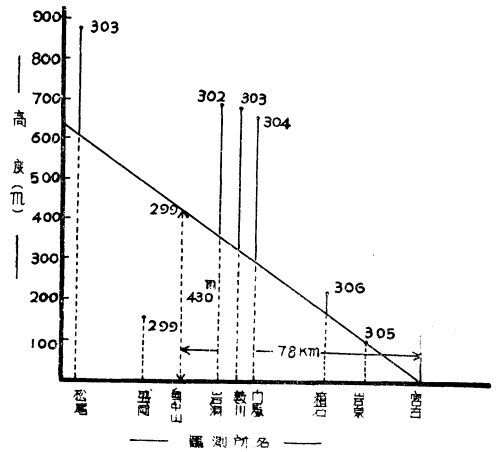
北上川ぞいの一の関、盛岡の気温の毎時変化を示したものである。これから宮古と岩洞の日の出後の昇温率がよく類似して大きく、内陸の一の関、盛岡の変化と著しい対照を示して、それぞれ異なった気塊に属している事を暗示している事がわかる。実際に最高気温の高度別分布を第4図についてみるとこの事が更に判然とし寒気塊（温位299°以下—気圧傾度が割合ゆるやかであったので気圧は盛岡又は宮古のものを使用）は海拔430mの奥中山以下の内陸に限られ、沿岸地方と海拔500m以上では遞減率0.7°C/100mにのって温位304°前後の暖気塊と考えられ明らかに前者と異なった気塊に属する事がわ

\* 盛岡地方気象台—1954年10月15日

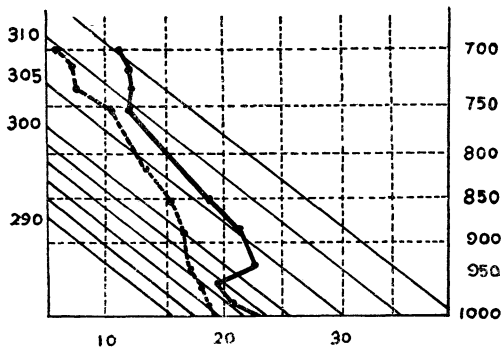
かる。



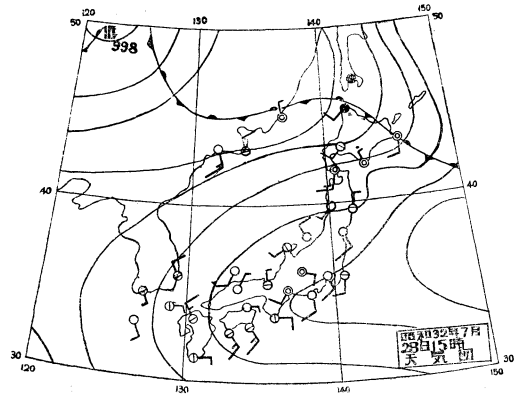
第4図 7月27日の最高気温高度別分布 (地名と併記した数字は温位を示す)



第6図 前面の東西方向の傾斜 (数字は温位)



第5図 7月27日12時 仙台の状態曲線 (エマグラム)



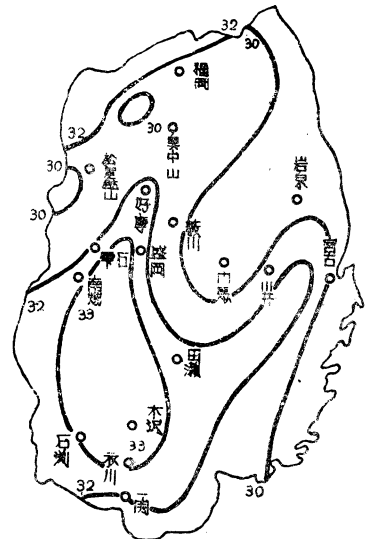
第7図 7月28日15時天気図

次にこの逆転面の傾斜について考える。第5図は仙台のエマグラムから得られた状態曲線である。仙台の上層950mbと925mbの間に顕著な逆転面があって、その温位は下層で297°前後、上層で305°内外を示して、第4図によるそれぞれの寒暖両気塊に対応している。仙台におけるこの逆転面の高度を大体830mとし、岩手県の寒気塊の上限を奥中山の430mにとればその南北方向の傾斜は大体北に1/400となって可なりゆるやかなものであるが東西方向は宮古—奥中山の距離78kmからほぼ1/200の傾斜となる。これを第6図に示す。

2. 7月28日の最高気温について

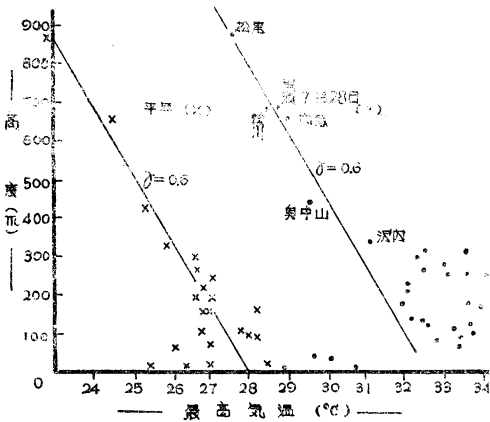
7月28日の天気図を第7図に示したが梅雨前線は宗谷海峡に北上してまづ夏型となり当日の最高気温の分布は第8図のとおり全県的に殆んど30°をこした。

第9図はこの日の最高気温の分布を高度別に示したものである。これから32°C以上の最高気温の観測点は殆



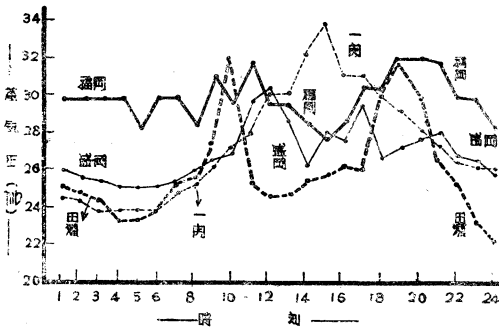
第8図 7月28日最高気温分布

んど海拔 300m以下の内陸に集中し、これは先に示した7月27日の高度別分布(第4図)と対照的な型となつて



第9図 7月28日(・印)及び平年(×印)の最高気温高度別分布

いる事がわかり、更に第8図により 33°C 以上の地域は盛岡以南水沢以北の北上川にそう地域である事がわかる。

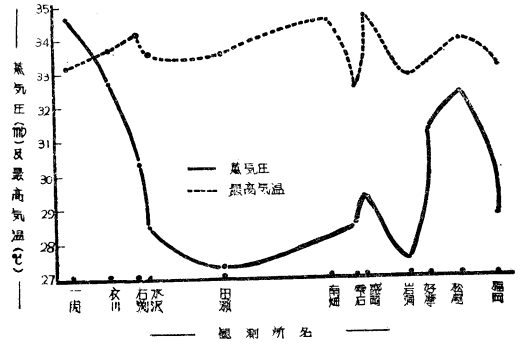


第10図 7月28日の各地の蒸気圧毎時変化

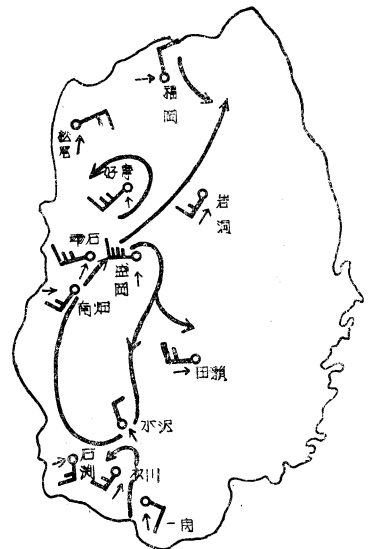
各地の蒸気圧の毎時変化を第10図に示した。ここで注目される現象は田瀬の11時における急降である。この傾向は程度の差はあるが盛岡、石淵、水沢等にも見られてこれは最高気温 33°C 以上を観測した地域に一致する、更に北上川ぞいの各観測点毎に、最高気温と15時の蒸気圧を示したのが第11図である。この図では最高気温は、0.6°C/100m、蒸気圧はハンの式でそれぞれ海面の値に更正してある。この図から次の点が指摘されよう。これら2要素の変化は

- (1) 盛岡以北で平行に
- (2) 盛岡以南では逆位相となり、そして
- (3) (2)の地域はこの日特に高い最高気温を観測した地域に相当する。

以上述べたことからこの地域に局地的な沈降現象を考えた。第12図は15時の各地の風向から求めた流線図で



第11図 北上川にそつ各地の最高気温と蒸気圧(15時)の南北変化、蒸気圧はハンの式  $\log f_0 = \log f + \frac{h}{6300}$ 、最高気温は0.6°C/100m で共に海面の値に更正してある



第17図 7月28日15時流線図(矢印は12時の風向)

ある。資料が少ないので完全ではないが前記(3)の地域に局地的な高気圧性の風系を示している事からも上記の沈降現象がうなずかれる。

あとがき 以上昭和31年7月27, 28日両日の最高気温の特異性について解析の結果を報告した。非常に簡単な調査で要領の得ない点が多いのであるがご叱正をいただければ幸である。

最後に種々討論していただいた三宅、関根、昆各技官に対し感謝いたします。